



朝廣和夫(あさひろ かずお)

1970年熊本県生まれ、宮崎県育ち。

1993年九州芸術工科大学環境設計学科卒。1995年同大学院を修了し、(株)アーバンデザインコンサルタントに入社。

1996年九州芸術工科大学環境設計学科助手として赴任、現在に至る。

緑地保全学を専門とし、都市近郊及び農山村地域における自然環境の保全・復元に関する研究を行っている。

<http://www.kyushu-id.ac.jp/asahiro/>

行こう！里地・里山へ！！

○里地・里山の保全

"Think Globally, Act Locally"といわれて久しいですが、ますます、地域での実践活動が必要とされています。先日、環境省は、身近な自然の保全・再生という新しい保護概念を国の政策に盛り込みました。昔から親しまれてきたメダカなどの身近な生き物が絶滅に瀕しており、その多くが生息する「里地・里山」の保全が必要だからです。この政策転換は、何を意味するのでしょうか？

「里地・里山」とは、地域の人々の暮らしに利用されてきた雑木林、草地、農地、そして溜め池のことです。昔から人々は、定期的に、草を刈ったり、水田に水を引いたり、雑木を間伐することで、食料や生活資材を採取し、美しい景観を管理してきました。また、様々な生き物の生息環境も、同時に用意されてきたのです。しかし、高度成長、産業型社会への転換の中で、都市化や農地の圃場整備、林地のスギ・ヒノキ林化により、その多くが失われてしまいました。さらに、農山村や農林業の空洞化が、それに拍車をかけています。便利さや経済最優先という、バランスの欠いた私達の価値観が原因です。

○保全に必要な発想の転換

この「里地・里山」の保全を進めるには、生産活動を行う事業体と、私達のライフスタイルに、二つの発想の転換が必要です。一つは、多様な生き物が生息できるように、個々の技術や施設を見直すことです。最近では、ビオトープや自然型工法が普及し始めましたが、大切なのは、存在する生態系や生息地を、地域固有の資源として守り育むことであり、あらゆる主体の相互支援、相互チェックなくして実現できません。

二つ目は、成長型社会から成熟型社会へ転換し、マイナス成長でも得られる豊かさを求めることです。急速な少子・高齢化の進展とデフレ経済の進行の中で、従来の開発予定地であった「里地・里山」を保全するということは、もはや国が、地域産業の振興による経済成長に限界を見出しているからではないでしょうか。これからの時代、生活と経済の「豊かさ」の実現は、個人や地域社会が主役であり、あらたな地域資源としての保全・活用策を検討しなければなりません。

○いざ、実践活動へ！

さて、実際に里地・里山を保全し、失われた場所を再生するのは容易なことではありません。それは、保全を支えてきた経済環境や生産活動、また技術を擁した人材が急速に失われつつあるからです。私は研究室の活動の中で、6年前から国際里山・田園保全ワーキングホリデーの実施に携わってきました。八女郡黒木町の有機農家を主体とした地域グループ「山村塾」と、環境保全や環境教育の実践活動を旨とした英国のNPO「BTCV(英国環境保全ボランティアトラスト)」と連携して、棚田の空石積みやスギの間伐などを合宿形態で行うものです。都市と農山村の住民、そして、大学やNPOの協働により、相互の問題を共有し、新しい交流や環境整備活動を実践的に継続してきました。この取り組みの中で得られたものは、人材の育成と、理解の輪を広げることであり、個人的には、体験でしか発見できない、農林家の顔、言葉、技術に触れ、そして、美味しく安全な食料を食べ、美しい風景の創造を通して自己実現できたことです。

最近では、私達のノウハウを福岡市内の鴻巣山緑地保全地区の市民活動に取り入れています。都市に残された貴重な森を守り育むには、土地所有者である行政だけではなく、日々のユーザーである、生き物達、そして、その声なき声に触れている、地域住民や各種専門家が加わり、楽しく保全・管理を共に実践する必要があります。この輪が、人の顔と顔を通してきめ細かく繋がることで、美しい都市、そして農山村の持続的なマネジメントが実現できると考えます。さあ、新しい発想と人材が必要です。あなたの身近に、新しい輪を作りましょう！！

